

日本人だけが知らない世界の常識

第二話 食文化編（後編）

さて、前回に続いて今回も、食文化における世界の常識を見ていきましょう。

海外では、ホームパーティーが開かれることがよくあります。自宅に友人を招いて、庭やリビングルームで手料理を食べるのです。三、四人のことあれば、十人以上になることもあります。欧米ばかりでなく、アジア各国にもこうした文化はあります。

一般的に、ホームパーティーは相手の家に色々な負担をかけますから、終わった後に丁寧なお礼をするのが常識です。お礼状を書いたり、ちょっとした物を送ったりもします。

では、海外ではどうなのでしょう。まずは、そのことから見ていきましょう。

【お礼メールは厳禁】

日本人の商社マンが、念願の香港勤務になった。学生時代から香港で暮らすことに憧れ、英語や中国語、広東語などの勉強をしてきた。アジアの国際都市で成功をおさめるのが夢だった。

その商社マンが赴任先のオフィスに到着すると、香港人の社員たちが次々に挨拶にやってきました。海外勤務中、部下として苦楽を共にしてくれる面々である。古参の香港人社員がこう言った。

「あなたは、私たちの新しい上司です。歓迎会をしたいと思います。については、私の家でパーティーを開催しますので、来て下さい」

夢にまで見た、海外でのホームパーティー。彼は喜んで行く約束をした。

その週末、彼は若い妻をつれて、部下の家に出かけた。部下の奥さんはチャイナドレスを身にまとって出迎えてくれた。テーブルの上には、豪華な料理が食べきれないほど並んでいる。食事はどれもおいしく、話は面白かった。パーティーが終わると、彼は「香港に骨を埋める覚悟で働く」と誓って帰宅した。

翌日、商社マンと若い妻は、部下の奥さんにお礼のメールを送った。「すばらしい夜をありがとう。ご馳走も本当においしかった、また手料理を食べさせてもらえるのを楽しみにしている」というメッセージだった。

ところが、週が明けて出社すると、雲行きが怪しくなっていた。会社にいる香港人従業員たちが陰口を叩くようになったのである。どうやら「今度の上司はセコい」という噂が広がっているようだった。たとえば、仕事のことでは何かを注意すると、ボソツとこつつぶやくのである。

「セコいくせに文句ばかり言いやがって」

何が起きたのだろう。お金に関してケチなことをしたつもりは一切なかった。

商社マンは思い悩み、東京にいる前任者に電話で相談した。ホームパーティーに出てみ

たら、知らない間に「セコイ」と噂されるようになったのだ。と。すると、前任者は笑って言った。

「それは、お礼のメールを送ったのがまずかったんだよ。この国じゃ、パーティーに誘われた後にお礼状を出すよ、『また飯を食わせる』という意味になってしまう。それで、従業員たちは、君のことをセコくて図々しい奴と思ってしまったんだよ」

これ以後、会社でついたあだ名は「けちんぼ日本人」。彼は現地のマナーを知らなかったばかりに、勤務中の三年間をひたすら陰口を叩かれて過ごす羽目になってしまった。

日本では、ちょっとした食事会に誘われたりしたら、お礼状を書くのがマナーですよ。準備をしてくれて、おいしいものを用意してくれたのなら、当然です。

ところが、国によっては、お礼をすると、「足りなかった」「次も誘ってくれ」というニコヤンスになってしまうのです。礼儀の意味が百八十度違うとは、困りものです。良かれと思っただけですが、悪い意味になってしまいますからね。

香港と日本で百八十度意味が違うといえば、「感謝」の意を示すためのテーブルマナーもそうです。

たとえば、日本のレストランでウェイターがご飯を運んできたときとします。その時、お客さんが指でテーブルを叩いたら、「遅い」とか「もっと早くしろ」といういら立ちを示すサインになってしまう。イライラを見せつける時、わざわざ指でテーブルを叩きますからね。ウェイターが気づいたら、「遅れてすみません」と謝罪するかもしれません。

一方、香港ではこの仕草は全然違う意味になります。香港人がウェイターの前でテーブルを指で叩くのは「運んできてくれて、ありがとう」のサインなのです。「ありがとう」という言葉の代わりに、指でテーブルをトントンと叩くのです。これを知らない人、「なんで香港人はイライラしているのかな」なんて思ってしまうかもしれませんが、まったく逆の意味なのです。

韓国にも、日本人がレストランでつい間違えてしまうテーブルマナーがあります。それは、お箸の置き方です。

日本のレストランで食事を終えた時、日本人の中にはお茶碗の上にお箸を置く人がいますよね。そうすることで、食べ終わったことを示すのです。特にお盆や箸置きがない時に、そうする人は多いと思います。

ところが、韓国で空のお茶碗の上にお箸を置くと、「お代わりを下さい」の意味になります。ウェイターがそれを見ると、黙ってお代わりを持ってきます。終了を示すには、お箸をテーブルの上に置かなければならないのです。

これを知らないと、本当に困りますね。かくいう私も、大失敗をした経験があります。大学生の頃、韓国の田舎をバスで一カ月かけて旅行したのですが、その時入ったレストランで、これをやってしまったのです。

私がお気なくアルミのお茶碗の上にお箸を置いたところ、おばさんがお代わりを持ってきたのです。おかずは全部食べてしまったのに、白いご飯だけが山盛り……。

店員はまったく英語が話せません。「ストップ」とか「満足だ」と言っても、おばさんは難しい顔をしているだけです。仕方なくご飯を食べてお茶碗に箸を置いたところ、またおばさんがお代わりを……。そんなことが延々とくり返され、ついに私は怒って「もう食べ

ない！」とか言つて、何とか意思を伝えることに成功しました。
今思えば、完全な逆切れですよ。恥ずかしい限りです。

【卵の不思議】

中国で働いていた日本人女性が、中国人男性と恋仲になった。中国人男性は田舎の地主の息子で、亭主関白な性格だった。以前から、日本人女性は家庭的でやさしいと聞いており、自分に合うと思つて付き合い始めたのである。この日本人女性もまた、そう思われるのが嬉しく、相手につきすタイプだった。

二人は数年間の交際を経て、結婚することに決めた。中国人男性は実家の両親をマンションに呼んで、ご馳走すると共に日本人女性を紹介しようとした。

当日、両親は立派な服を着てやってきた。日本人女性も気に入ってもらつたため、朝から腕をふるつて料理をつくつた。ゆで卵を出すのがもてなしの一つだと聞いていたため、サラダにはゆで卵の黄身の部分だけを載せた。だが、両親はムツとしたままそれに箸をつけようとしない。

日本人女性は焦った。サラダに載せたのが気に食わなかったのだろうか。彼女は慌てて、ゆで卵だけを十個つくつて出した。すると、夫が横で耳打ちした。

「中国では、白身と黄身を分けて出すんだよ」

彼女は慌ててそれらを白身と黄身に分け、美味しい黄身の部分を差し出した。すると、両親は突然テーブルを叩いて言った。

「この日本人は、わしらをからかっているのか！ こんな失礼な奴との結婚は許さん！」
そして、マンションを出て行ってしまった。

後日、中国人男性から教えてもらったところによると、中国人は黄身の部分はマズいと言つてあまり食べず、白身の部分を大切に食べるらしい。つまり、黄身の部分を大切にする日本人とは正反対の食習慣を持っていたのだ。日本人女性はそれを知らず、黄身の部分だけを出してしまい、相手を侮辱することになってしまったのである。両親の逆鱗に触れたのは、そのためだったのだ。

このカップルは、未だに結婚を許してもらっていない。

中国と日本の食文化は近いようで遠いですね。日本と中国とでは、味覚や価値観がまったく違うのです。特に、現地の文化に一步踏み込むとそれを感じます。

たとえば、日本でも中国でもよく食べられるもの一つに、餃子があります。日本では餃子と言えば「焼き餃子」ですよ。薄い皮をパリッと焼いたものが好まれます。これはおかずであり、ラーメンやチャーハンなどメインの何かと一緒に食べるのが普通です。

一方、中国で餃子と言えば「水餃子」のことです。そして、中国人は主食として餃子を食べます。彼らは、餃子の皮を日本のそれよりはるかにぶ厚くし、皮を主食として食べ、中の具はおかずという感覚です。日本の食べ物にたとえて言えば、餃子そのものが牛丼であり、米の部分が皮に、牛肉の部分が具になるということです。中国の餃子の皮が厚い理由がわかりますよね。

ですから、中国人は餃子を他の主食と一緒に食べるようなことはしません。彼らからす

ると、日本人がご飯と餃子を一緒に食べている光景は、主食と主食、つまりご飯とパスタやパンと一緒に食べているように映るはずですが、それを知らずに注文すると、ギョツという目で見られることがあるので注意してください。

ちなみに、中国ではシューマイや春巻きなんかと同じ主食として考えられています。皮で具を包む料理は全般的に主食なのです。

また、主食と言えば、アフリカ諸国では、バナナや芋が日本でいう米の代わりになります。バナナや芋をすりつぶしてお餅のようにした食べ物もありますが、バナナや芋がそのまま出てくることもあります。お皿の上に巨大なバナナや芋がおかずと一緒にデザートと載っかっているのです。これは、慣れるまで違和感がありますね。

以前、レストランでカレーを頼んだら、カレーとバナナが別々に出てきたことがありました。周りを見ると、皆カレーにバナナを浸して食べています。果物として食されるバナナとは種類の異なる「食用バナナ」なので甘さはなかったのですが、複雑な思いを拭うことはできませんでした。味はどうあれ、日本人にはバナナや芋をカレーにつけて食べるような習慣はありませんからね。

【店員を呼ぶ】

日本人旅行者がインドへ行った。宿泊した宿は家族経営で、二十歳ぐらいの美しい娘さんが働いていた。

彼は最近の若いインド人女性は、欧米人と代わらないぐらい恋愛に対してオープンだと聞いていた。そこで、彼女を食事に誘ってみた。すると、彼女はあっさりOKしてくれた。

その夜、二人は町のレストランへ行き、食事をした。豪華なインド料理を食べ、ワインを開けた。ほろ酔い気分になった時、突然彼女が立ち上がって唇をつぼめた。キスをするように唇を突き出したのである。

求められているに違いない！

日本人旅行者は浮き足立ち、人目を憚らずに立ち上がって、突き出された唇にキスをした。すると、彼女は驚いて、彼の頬つぺたを思いきり殴りつけた。

「最低！ 私、帰る！」

一体どうしたのだろう。それを見ていたレストランの従業員が噴き出しそうになるのを堪えながら教えてくれた。

「インドでは、ウェイターを呼ぶ時に、唇をすぼめて音を立てるんだよ。きつとお会計をしたかったんだ。彼女はキスを求めていたわけじゃない」

日本人旅行者はそう言われて、初めて自分が誤解してキスしたことを知ったのである。

これはインドやネパールの習慣ですね。南アジアでは、ウェイターを呼ぶ時に唇を尖らせて音を立てたり、舌を鳴らしたりするのです。最初は、鳥が鳴く真似をしているように見えたり、何か文句を言いたくて舌打ちしているように聞こえたりします。

この日本人旅行者は、それを見てキスを求められていると勘違いしてしまったのでしょ

う。

これとは別に、海外のレストランで日本人がよく間違えるのが、「チェック（お勘定・会

計」のサインですね。日本人の中には、人差し指を二本重ねてバツをつくって、「お勘定をお願いします」のサインにしている人がいます。「メ」のサインなのでしょう。

しかし、海外ではこうしたサインは使いません。片手を広げ、もう片方の手でその上に文字を書く仕草をするのです。つまり、伝票を書いている仕草です。これが、「お勘定をお願いします」という意味になるのです。

が、この世界標準のサインを知らない日本人が結構いるのです。

私は学生の時から海外へ行っていたものですから、知らず知らずのうちに世界標準のサインの方が身についています。以前、日本のレストランでこのサインをしたら、こともあろうにノートと鉛筆が出てきたことがありました。私がメモの道具をほしがっていると勘違いしたのでしょう。レストランの従業員なんだから、これぐらい憶えておいてくれよ、と思いました……。

あ、でもまったく反対のことがありましたね。私が日本人の友人と一緒にトルコ料理屋へ行った時のことです。食後、友人がお会計をしてもらおうと、日本流の「メ」のサインをしました。そしたら、トルコ人ウェイターが心配そうな顔でやってきてこう言ったのです。

「ごめんなさい。まずかったですか」

きつと「バツ」のサインとして受け止め、友人にマズいと訴えられたと勘違いしたのでしょう。

食後のサインも、文化が違つと楽ではないのです。